

第Ⅵ章 ま と め

1 礫組井戸について

北陸地方の 2001 年までの中世井戸については、北陸中世考古学研究会が集成している [北陸中世考古学研究会編 2001]。北陸の傾向を確認しながら、越後はその後の成果を含め、本遺跡に特徴的な礫組井戸について考察する。

越前・若狭では 13～14 世紀は素掘りの井戸で、曲物使用が多く、14～15 世紀も素掘りが大半で 16 世紀に入って石組井戸が出現し、一乗谷遺跡はすべてが石組となる。白山平泉寺旧境内遺跡では素掘り・石組半々となり、都市部は石組、農村は素掘りの見通しを持っている。

加賀では石組井戸は 11 世紀中葉～12 世紀後半、13 世紀からあるが、ほとんどが 14 世紀であり、切石を使用した井戸が白江梯川遺跡、永町ガマノマリ遺跡で数基認められる。

能登では、石組井戸が 8 世紀代の中美麻奈比古神社前遺跡で検出されているのが最も古く、14 世紀前半に寺家遺跡で検出され、14 世紀後半から増加する。礫が付近に豊富にあるところでは石側を採用しているとしている。

越中では、12 世紀後半～15 世紀が木側、石組は 14 世紀に出現し、15 世紀から井戸の主体となり 18・19 世紀まで続く。粘質土系台地は素掘り、沖積地は木・石組を採用しているとしている。

越後以西での石組井戸の出現時期、盛行の時期は多少の違いがあり地域色が出ているようである。

越後では、越中と傾向が似ており礫組井戸が採用されるのは 14 世紀代で、城館や有力集落に広がるのは 15 世紀代である。切石組は無く礫組のみで下越に多い特徴がある。これは、下越で館の発掘調査例が多く、上・中越で少ないことが理由と考えられる。

第 3 表は越後の礫組井戸を集成したものである。遺跡数は 13¹⁾、井戸数は 38 基、上越では 4 遺跡 8 基、中越は 3 遺跡 5 基、下越は 6 遺跡 25 基である。圧倒的に下越が多いが、胎内市江上館跡 [水澤 1997]、下町・坊城遺跡 [水澤 1999・2005] で 19 基を占めるのが特徴的である。全体的に集落より城館跡や寺院などでの検出が多く、国人層などに広がった井戸の築造方法と考えられる。特に阿賀北衆と呼ばれた人々が割拠した阿賀野川以北の地域に多い。糸魚川市の山岸遺跡 [春日ほか 2012] は鎌倉時代の越後守護名越氏関連の集落であるが、越後での礫組井戸の最も古い例となる可能性がある。本遺跡の井戸では、SE9 の礫組井戸が珠洲Ⅲ～Ⅳ期 (13 世紀後半～14 世紀中葉) と越後での出現期に近い可能性がある。SE22 の礫組井戸は陶磁器類の出土が無いが、越後では水溜めに結桶が使用されるのは 15 世紀後半以降とされるので、SE22 はほかの遺跡と同様 15 世紀後半以降の可能性が高い。

井戸の歴史的展開とその背景について鐘方正樹氏 [鐘方 2003] は、石組井戸は日本では 7 世紀前半ごろに出現する。その後、8 世紀初頭までは飛鳥地方などで少量確認できるが、8 世紀前半 (奈良時代)～12 世紀後半 (平安時代末) までの間はほとんどなくなる。12 世紀後半になって平安京で石組井戸が急速に普及し始めるのは、保元・平治の乱 (1156・1159 年) での社会の混乱、1177・1178 年の平安京始まつ

1) 上越市至徳寺遺跡で中世後期の石組井戸が検出されているようだが、未報告のため含めていない。

遺跡名（所在地）	遺跡・遺構の時期	遺跡の 性格	立 地	地山 の質	Ⅱ：礫（A・B）＋別構造（1～3）			備 考	文 献
					Ⅰ：礫のみ A：6段以下、B：1m 前後以上 SE9：A 礫 3 段	Ⅰ：柳 枝	Ⅱ：曲物 2：曲物 3：結桶 SE22：A		
狐屋敷遺跡(村上市)	14C 後～15C	集落	沖積地	砂				小河氏関連	本報告。
古渡路遺跡(村上市)	13C 後～15C 中	集落	沖積地	砂礫			SE648：B 礫 12 段 100cm、木脚痕跡		『新潟県埋蔵文化財報告書第 221 集』2011
西部遺跡(村上市)	近世	集落	沖積地	—		SE090：B 20 段 190cm		底面礫敷き	『新潟県埋蔵文化財報告書第 148 集』2005
長松遺跡(村上市)	15C	寺院	沖積地	砂		SE45 古：A			『神林村埋蔵文化財報告第 3』1991
江上館(胎内市)	15C 後	城館跡	沖積地	—	井戸 902：B 礫 11 段 井戸 937：A 礫中央 5.6 段 井戸 17：A 礫 6 段 80cm		SE45b 新：B	中条氏居館	『江上館跡Ⅴ』中条町 1997
下町・坊城遺跡 (胎内市)	12～16C	屋敷地	沖積地	—	井戸 18：20 数段 210cm			D 地点	『下町・坊城遺跡Ⅲ A 地点』中条町 1999 『下町・坊城遺跡Ⅵ D 地点』中条町 2005
	16C 中～			—	井戸 120：B			D 地点	
	15C			—	井戸 232：A 礫 5.6 段			D 地点	
				—	井戸 334：B 礫 20 段 140cm			D 地点	
	15C 末			—			井戸 411：B 礫 90cm 結桶 2 段	A 地点	
	15C—第Ⅲ四半期			—	井戸 494：礫 190cm			A 地点	
	15C 後			—	井戸 478：A 礫 4 段			A 地点	
	15C—第Ⅲ四半期			—	井戸 496：A 礫 3～5 段			A 地点	
				—			井戸 509	A 地点	
				—	井戸 626：B			A 地点	
				—	井戸 768：A 礫 1～2 段			A 地点	
	15C 前			—	井戸 769：B 礫 180cm			A 地点	
	～15C 前			礫層	井戸 778：A 礫 5.6 段			A 地点	
				礫層	井戸 779：B 礫 120cm			A 地点	
				—	井戸 802：B 礫 110cm			A 地点	
				—	井戸 824：A			A 地点	
余川中道遺跡 (南魚沼市)	14～16C	集落	沖積地	—	SE74：B 礫 100cm				『新潟県埋蔵文化財報告書第 139 集』2005
御館遺跡(南魚沼市)	中世	城館跡	沖積地	—	1 基未報告			鍛冶関連遺構	『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報平成 21 年度』 2010
伊達八幡館跡 (十日町市)	15C 前～16C 前 15C	城館跡	段丘	砂礫	井戸 1：B 礫 90cm 井戸 2：B 礫 90cm			建物 10 に付属 建物 12 に付属	『十日町市埋蔵文化財報告書第 26 集』2005
仲田遺跡(上越市)	15C	集落	沖積地	シルト 砂	SE219：A 礫 3 段 SE247：B 礫 180cm			素掘り 83 基	『新潟県埋蔵文化財報告書第 128 集』2003
春日山城(上越市)	16C	山城	山地	—	SE6			上杉氏居城	『春日山城跡発掘調査概報Ⅵ』市教委 1984
高畑遺跡(上越市)	中世	集落	沖積地	—	SE15				『新潟県埋蔵文化財報告書第 42 集』1986
山岸遺跡(糸魚川市)	13～14C	集落	沖積地	—	SE22：B 礫 100cm SE1324：B 礫 7 段 80cm SE3845：B 礫 70cm SE3846：B 礫 75cm			名越氏関連	『新潟県埋蔵文化財報告書第 228 集』2012




第 3 表 越後の礫組井戸一覧

て以来の大火によって、井戸枠に転用する建築資材が失われ、木材の大量需要が発生したことで価格の高騰が考えられる。このため、近辺で容易に採取できる石を利用して石組井戸が作られるようになり、逆に、大火や戦乱を免れた地方では木製の井戸枠が使用され続けた。井戸枠の構造が木組みから石組へと変化していく現象は地方でも認められているが、その分布は有力者の居住域周辺に偏在する傾向がある。これは、京都を中心に盛行しつつあった石組井戸が外見的に都市型井戸様式として転化するような状況が生じ、それを意図的に模倣することによって起こったとする。

室町幕府発足後、1341年に足利幕府の重臣である上杉憲顕が越後国守護職となり、以後代々上杉氏が守護となる。上杉氏の越後の支配が進むにつれ、国人たちとの関係も強化され、しだいに越後国中に京都の文化も流入したと考えられる。越後の国人には「在京役」なる軍役が課され、守護上杉氏のもとで京都の警備に当ることになっていた〔山田 1987〕。在京中に見た都の石組井戸がそれぞれの館で再現され、所領の中でも「村殿」といわれた村落領主の間にも採用されたのではないだろうか。

2 陶磁器から見た遺跡の消長

本遺跡からは中国からの輸入陶磁器と国産の土器・陶磁器が出土している。これらの出土遺物から遺跡の消長を考察する。輸入・国産陶磁器の時期を第4表に示した。国産陶磁器は、わずかではあるが平安時代の須恵器・土師器が出土していることから、9世紀後半～10世紀初頭ころから周辺での人々の活動が知られる。その後、中世の12世紀末までは人の動きは無く、本遺跡が再び動きを見せるのは13世紀初頭である。出土遺物が増えるのは14世紀後半～15世紀代である。このころに小河村も最盛期を迎え小河氏も「村殿」（村落領主）として本庄氏の支配下にあったと考えられる。資料に小河氏の名が初めて見えるのは1481年のことである（第5表）。ただ、隷属的な支配関係ではなかった両者の関係が変化するのが、本庄長資が小河弾正左衛門長広の養子に入った時期（年不詳）と考えられる。小河氏を家臣とするため養子に出した長資は、天文8（1539）年に本家の本庄氏に対し謀反を起こし、同20（1551）年に耕雲寺において甥の本庄繁長に切腹させられる。その後小河氏は鮎川氏に帰属する。鮎川氏の居城があった大場沢から東の石住へ至る道沿いに100m余にわたり十三塚があった。これは切腹した小河長資以下、13人の死者を葬った場所と伝えるが現存しない〔大場ほか 1986〕。小河村は一時期荒廃し、のちに本庄氏の家臣である石栗将監が入ったとされるが〔田中・大場 1999〕、具体的な年次は不明である。小河村の重要性を考えると、そう間を置かないとも考えられる。石栗氏は旧小河氏の館があったとされる場所には入らず、周囲に集住したと見られる。慶長2（1597）年の「瀬波郡絵図」（第6図）には「小河村 鮎川・大国 但馬分 中（地味） 本納 合百六十九石六斗七升五合 縄ノ高 三百四十六石八斗八升九合 家合十三間」と書かれ、数件描かれる屋敷は石栗氏を中心と考えられる。小河氏の館のあったとされる地には、元和元（1615）年には旧朝日村の寺尾から金源寺が移築された。近世の17世紀後半～18世紀中葉の時期の遺物が欠けているが、調査区が狭小なことと関連すると考えている。その後は幕末～現代までの遺物が

種 別	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀
輸入陶磁器										
国産陶磁器										

第4表 陶磁器から見た遺跡の消長